

九州沖縄土を考える会総会研修会を開催しました。

2024年3月25日

九州沖縄土を考える会は、2月27日(火)・28日に、福岡県にて総会・研修会を【**土壌の本質をつかむ。**】をテーマに開催しました。屋外現地では、農研機構 農業環境研究部門(農環研)とスガノ農機の共同研究として全国各地で行われている土壌断面調査とモノリス採取を大刀洗町の柳さんのほ場で行いました。1m50cmの断面には土層の成り立ちや、柳さんの行われてきた土づくりの痕跡が表れ、参加者の方々は農環研の前島勇治氏の解説に興味深く耳を傾けておられました。



谷教授



里方課長

場所を屋内のホールに移して、「土壌の力を引き出すために～土壌断面調査と土壌診断の活用法～」のタイトルで、帯広畜産大学 谷 昌幸教授のご講演をいただきました。良い土壌の条件から始まり、それを確認し、改良していくための指針となる土壌診断の項目から塩基飽和度とCECに特化したお話しは、具体的な数値の意味を理解して全体のバランスを確認してから対処することの重要性を感じて頂けたのではないかと思います。引き続いての九州農政局、里方弘祐課長からの「みどりの食料システム戦略」では、SDGsや環境問題を前提にした、これからの農政の方向性を分かりやすくご説明いただきました。

その後の懇親会では当会恒例となっている、ご当地自慢の品を持ち寄っての「お土産交換会」も行われ、いつものように活発な情報交換が深夜まで続きました。

翌日は、前日のほ場へ移動し、土壌モノリスを採取して閉会となりました。同時に開催となりました九州沖縄土を考える会総会は、全ての議案が承認され、今年度の夏期研修会についての検討が行われ、今回実施した前島氏による土壌断面調査と谷教授による勉強会の第2弾を9月に大分で開催することといたしました。開催日程が決まりましたら改めてご案内させていただきますので、よろしくお願いいたします。



牧野会長



前島先生の断面とくちコメント

福岡県三井郡大刀洗町下高橋

柳農場(緑肥:ヘアリーベッチ、前作:大豆)

筑後川中流部の氾濫平野の沖積土です。稲(乾田直播)→麦→大豆の2年3作のほ場で、作土層はディスクハロー(0~15cm)とプラウ(0~30cm)により適度に砕かれ、2~3mmの団粒や1~3cmの土塊を観察できました。下層土には管状斑鉄(湿地帯のヨシや水田のイネの根の周辺に集まった鉄さびで、根の孔に沿ってできるため、パイプ状を示す。)が多く、グライ層はありません。サブソイラによる亀裂が深さ45cmまで達していますが、深さ29~35cmにプラウによる光沢層があり、その直下は粘土が多いため、サブソイラの施工深は35cm程度にとどめた方が良いでしょう。最下層のオレンジ色は地下の昇降によって鉄が集まった層で、「高師小僧」と呼ばれる管状斑鉄の結核(写真右)があることから、かつてこの辺はヨシなどの湿地帯であったことがわかります。



高師小僧



実際の土壌断面を見ながらの前島氏による解説



採取された土壌モノリス



手前、左から前島氏、谷教授、柳さん

次回
2024年
9月18日・19日
大分開催予定